授業科目名	共生科学概説（２）	単位数	2
担当教員名	鬼頭　秀一・坪内　俊憲・保屋野　初子・西原　智昭	担当形態	オムニバス
実務内容（坪内俊憲）	WHO 寿命と食に関わる疫学調査に栄養学専門家として従事した経験のほか、主に開発途上国地域において自然保全、野生生物保全管理分野の国際協力プロジェクトに関わる専門家、およびコンサルタント業務に従事し、国内外の NPO・NGO 設立運営を実践して来た現場型教員として、星槎大学大学院においては環境教育特論他、星槎大学においては共生のための地球行動論、問題解決のための国際協働論、生物多様性と資源利用などの科目を担当。学生を始め広く参加者を募りモンゴル、ボルネオでのスタディーツアーを共生実習として企画・実施している。		
実務内容（保屋野初子）	環境ジャーナリストとして国内外で取材活動を行い、記事、著作、講演などを通して環境問題のなかでも水問題（ダム開発や水汚染、水道問題など）の現場とその背景を調べ伝える調査報道的な仕事とともに、編集者としても多くの雑誌、書籍の製作にかかわってきた。仕事をしながら大学院の修士課程、博士課程に進んで研究を行い、修了後に大学で授業をもつようになり今日に至る。社会貢献活動としては、小規模水道を支援する NPO 法人の立ち上げ・運営に関わり 15 年余、公益財団法人日本自然保護協会理事は 8 年間務めた。星槎大学では、環境社会学、水環境論のほか演習科目として、沖縄県北部地方での「やんばる演習」、長野県小谷村での体験的な里山演習」を実施している。		

「学位授与方針」の方針との関係

A～F に関連している。A:３名の専門が多様な教員が担当することで、環境に関わる専門的知識を生かした上で、狭い専門領域を超えて統合している。B:環境に関わる具体的な問題の現場で、どのような形で専門知や統合知を使って実践するのか例を提示し、グループワークを通してそれを実践している。C:環境に関わる、人間以外の生命やブラジルの先住民族のような遠く離れて異なる文化的社会的基盤で生きている人たちに対して、共感を持って理解することを中心的に取り上げている。D:環境に関わる社会的公正の問題を中心的に取り上げているため、他者を認め、排除しないあり方、さらに、それを乗り越えて仲間を作り協働の精神で新たな方向性を模索し、広い意味での自然との共生の道筋を提示している。E:具体的な問題提起に対してグループワークで議論してそれを共有することを通じて、改めて共生社会の道筋を学生自身の関心の中で探究していくことを求めている。F:限られた時間内であるが、講義自体が開いていることで、この講義をきっかけにさらに学び続けて探究していることを求めている。

授業の到達目標及びテーマ

（１）ヒトが出現できた地球環境の幸運を学習する。
（２）地球上に生命が誕生した歴史とヒトへの道のりを理解する。
（３）人間活動による地球環境問題について学び、どのように考えなくてはならないかについて深める。
（４） 開発が進む現場の実態と背景を知り、自分が住む社会や生活との関係を理解できる。
（５）人間が出現以来、歴史的に自然とかかわり、営みを紡いできたあり方に鑑み、近代以後に自然を野放図に一方的に収奪してきた歴史も踏まえた上で、私たちがこれから自然とか

かわるあり方について展望できる。

授業の概要

適度に安定し、適度にかく乱された地球環境は、全くの偶然の結果できた。与えられた環境の中で生き物が気の遠くなるような時間をかけて、人間が出現できる環境を整えてくれた事を学修する。

枯渇する水、増え続ける汚染、さまよい続ける放射性廃棄物、減少する森林、地球の歴史上のどの大絶滅よりも速い速度で絶滅していく生物種。人間活動が明らかに生物圏の許容量を超え始めたことを理解し、予防原則に則って、どのように判断し、行動していかなくてはならないか思考力を深める。

地球レベルあるいは地域レベルの環境問題は、どこで何が、どんなふうに起きているのか、誰がかかわり、誰が影響を受けているのか、そしてその問題と私たちとがどうつながっているのかについて、国内外の具体的な事例を通して知る。海外の事例では、水・鉱物・食糧の開発最前線となり熱帯雨林の破壊と社会の荒廃が進むブラジル・アマゾン地方での実態とその背景をケーススタディする。国内事例では、里山の暮らしを今も守る住民を追いやって進められるダム公共事業の現状と問題点をケーススタディする。それぞれの問題が現在の経済・社会のしくみや私たちのライフスタイルと深く結びついた構造的なものであることを理解し、それに対する自分なりの考えをもち今後の行動や活動に生かす。

上記の環境危機に対して、私たちが自然とどのようなかかわりをするべきかについて、さまざまな運動があり、また倫理的な考え方が出現し、私たちがどのように考え方を変えていくべきかについて議論があった。そのことを振り返りつつ、これからの「共生」のあり方について展望できるように学修を進める。そして、人間にとっての環境とのかかわりの問題は、単に自然的環境との関係に留まらず、社会的な環境との関わりや精神的な環境との関係なども含めた、より統合的な形で捉えることが必要であることを学修する。

また、1992年のリオ・デ・ジャネイロにおける地球サミットの意義について理解し、環境正義の視点から、「共生」という概念を根本的なところことが出来るようにしたい。さらに「持続可能性（サステイナビリティ）」という概念や持続可能な開発のための教育（ESD）について理解を深め、2015年に国連で採択された「アジェンダ２０３０」とその中心的概念である「持続可能な開発目標（SDGs）」を 17 の目標の「統合性」という「環境倫理」の本質的な観点から理解する。

授業計画

第１回：ヒトが出現できた地球環境の幸運；奇跡に近い幸運を知る（担当：坪内俊憲）

第２回：なぜヒトが出現できたかの理由を理解する（担当：坪内俊憲）

第３回：崩れていく地球生物圏のバランス；水、汚染、廃棄物の現実を理解する
（担当：坪内俊憲）

第４回：分断される命の絆；生物の絶滅に関して理解を深める（担当：坪内俊憲）

第５回：地球生物圏の許容量を超える人間活動；人口、経済成長の意味を理解する
（担当：坪内俊憲）

第６回：どのように考え、行動し、伝えなくてはならないかの思考力を深める
（担当：坪内俊憲）

第７回：資源開発の最前線、ブラジル・アマゾンの熱帯林破壊の実態と影響を知る

（担当：保屋野初子）
第８回：熱帯林破壊の背景、日本の関わりも含めた海外との関係を理解する
（担当：保屋野初子）
第９回：里山とは何か、里山を守る住民が抵抗し続ける石木ダム問題を知る
（担当：保屋野初子）
第１０回：石木ダム問題を環境正義の視点から捉え、公共事業のあり方を考える
（担当：保屋野初子）
第１１回：「持続可能な循環共生社会の構築」が課題になってきた背景を理解する
（担当：鬼頭秀一）
第１２回：人間中心主義への反省と人間非中心主義的な環境思想について理解する
（担当：鬼頭秀一）
第１３回：リオの地球サミットの重要性と環境正義の考え方について理解する
（担当：鬼頭秀一）
第１４回：人間と自然との関係に基づいた環境倫理の考え方について理解を深める
（担当：鬼頭秀一）
第１５回：ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）の歴史的背景と現代的意義を理解する。
（担当：鬼頭秀一）
定期試験

スクーリングでの学修内容
テキストを学修した事を前提にして、スクーリングは開講される。坪内俊憲と保屋野初子と鬼頭秀一は共同で、1、3、4 章を中心としたスクーリングを実施する。担当する教員の専門分野を中心に、環境に過度の負荷を与えず、自然と共生し、自然の循環に準拠する社会を築くため、どのように考え、どのように判断し、行動しなくてはならないかを主にディスカッション形式で考えを深め、持続可能な循環共生社会構築のための基盤を構築する。（主としてスクーリング担当の教員が分担したテキストの内容を含む。）

教科書
坪内 俊憲・保屋野 初子・鬼頭 秀一『人と自然が共生する未来を創る』星槎大学出版会(2018年～)

補助動画教材
・野生生物と人類を考える講座～グローカルで超分野視点から学ぶ～　20～50
・持続可能社会創生学④⑤⑥⑧
・SDGs の物語をつくる①～③
https://www.youtube.com/playlist?list=PLwrsvYhJb8rKKLwM-kh2_e8T9Ozs-VtDt

参考文献
テキストの資料に示されている。

学生に対する評価
スクーリング評価（２５％）、レポート評価（２５％）、科目修得試験（５０％）を総合して評価する。